

(一) 楽波

虫の音が止んだ。

(誰か来たのかしら。)

阿閉皇女は体を硬くして耳を澄ました。夏ももう終わろうというのに、いつ

までも蒸し暑い夜が続いている。ここは近江宮の奥深く。

「これは。皇女様。こんな夜更けに、いかがなされました。」

庭で侍女の押し殺したような低い声。

「あら。ごめんなさい。あまり暑苦しいものだから。」

ひそやかに澄んだ声。あれは御名部皇女。

(ああ。お姉様。)

ほつとして起き上がると阿閉も静かに庭へ出た。

月はまだ出ていない。夜空には満天の星がきらめいている。

「外のほうがいい気持ち。」

かすかな風が汗ばんだ肌に心地よい。

「ごめんなさい。起こしてしまつて。」

「私も眠れませんでしたの。なんだか胸騒ぎがして。」

父近江宮大王が亡くなって早や半年。ここ近江の都は、長兄大友皇子が

王位を継いで、一見静かに喪に服している。ただ、吉野にこもつた叔父大海人

皇子の動きが気になる。「虎に翼をつけて野に放つたようなもの」と噂する者

もいるという。かつて乙巳の変の後、父中大兄皇子は、吉野に籠つた伯父

古人大兄皇子を、先手を打って殺した。同様に、大海人を討つて、後顧の憂
えを絶つべきだと主張する者までいると聞く。

不安と緊張の中、都は静かに眠っているかのように見える。この夜何かが
起ころうとしていることに、姉妹はまだ気づいていない。この時、御名部十
五歳。阿閉は十二歳。

下弦の月が、ようやく対岸の山の端から顔を出した。琵琶湖の楽波に弱々

しい月の光が差しして、暗闇の中にかすかに黒い人影が浮かび上がる。足音を忍ばせてはいるが、かなり急いでいるらしい。とある館やかたの裏木戸の前で足を止めると、辺りに人のいないのを確かめて静かに戸を叩く。しばらく待つと、中から木戸が開いて、奥の庭に通された。扉の向こうに人の気配。男は片膝をつくと取次とりつぎを乞こう。

「おとこのやすまろ
「大伴安麻呂様の使いの者にござりまする。御内室様に急ぎ内々にお伝えいたしたき議ぎがござりまする。」

人の去る気配がしてまたしばらく待つと手燭てしよくのゆらめきと共に数人の衣擦きぬずれの音が近づいてくる。

咳せき払いがして低い老女の声が聞こえた。

「御内室様のお出ましです。」

男は声をひそめる。

「吉野から密使が参りました。今朝方、大海人皇子様が吉野を発たれたとのことです。高市王たけちのおおきみ様と大津王おおつのおおきみ様はすでに宮を出られました。戦になりま

す。御内室様には急ぎお子たちを連れて難波なみわの荘へお逃げになるようにとの

こととございます。私がお供をいたします。」

灯りの向こうが一瞬ざわめいてすぐに静かになった。

「ご苦労でした。しばらく下がってお休み下さい。」と老女の声。

男が姿を消すと老女が尋ねた。

「いかがあそばします。」

「私は残ります。」

郎女いらつめの声に迷いはない。予想はしていた。覚悟かくごはできている。戦になれば都も戦場になるかもしれない。高齢の父を置いて逃げるわけにはいかない。

「では、近江方におつきになるのですね。」

「近江方でも吉野方でもありません。ただ、お父様を置いては行けません。でも、子供達は大伴のお子ですから、ここには危険です。難波の荘にやりましょう。」

すぐに旅姿になった旅人たびとと田主たぬしが連れて来られた。幼い田主は乳母に手を引かれて目をこすっている。八歳の旅人は辺りの異様な空気に不安げな表情を見せる。

「お母様。こんなに早く、どうなさったのです。」

母は腰を落とすと二人の幼子おきなを抱き寄せてじっと眼を見つめた。

「戦になります。近江と吉野の戦です。お父様は吉野方です。ですから、そなたたちがここには捕まってしまう。お迎えが来ましたから一緒に難波の荘へ逃げなさい。」

「お母様は。」

「私が一緒では人目につきます。私がおじい様のお相手をしている間に、早く逃げるのです。」

「でも。」

今別れてしまつては、もう二度と会えないかもしれない。そう思うと旅人の幼い胸は張り裂けそうになる。母の目にも涙が浮かぶ。郎女は旅人と田主の手を取った。白魚のようなその細い手のぬくもりを、旅人は生涯忘れない。

「私のことは心配しなくともよい。そなたたちは大伴の子です。大伴は武人ものふの長おさです。武人の子らしく強く生きねばなりません。泣いてはなりません。

さあ、後ろを見ずに行きなさい。」

(はい。お母様。)

返事をしたつもりが声にならない。胸が熱くなって大粒の涙が旅人の頬を伝う。

「行くぞ。」

「嫌だ。お母様と一緒にできや嫌だ。」

何事かもわからぬまま、田主は泣いて母にしがみ付く。その手を邪険に引いて歩き出したのは、涙を見られたくなかつたからかもしれない。

母と別れて庭を横切つた時、突然声をかけた者がいる。

「そこで泣いておるのは田主ではないか。こんなに早くにどうしたのだ。」

旅人はぎよつとして足を止めた。暗がりから姿を現したのは、館やかたの主巨勢あるじこせの比等ひとである。

「あつ。おじい様。」

旅人にはどう答えてよいのかわからない。どきまぎして後ろを振り返ると、

扉の外で見送っていた郎女が慌てて駆け寄つた。近江朝の御史大夫ぎよしたいふである比等に知れては、吉野の拳兵が筒抜けになつてしまふ。旅人と田主だけでなく、先に逃げたという高市や大津も捕まるかもしれない。

「おはようございます。お父様。ずいぶんお早いのですね。」

比等は黙つて孫の旅姿と、いつもと変わらぬ娘の姿を見比べた。郎女はまっ

すぐ父の目を見つめる。その瞳には一步も譲らぬ母の思いが込められている。

比等は全てを悟った。

「そなたはよいのか。」

「はい。お父様のお側に。」

「ふむ。まあ、それもよからう。」

比等は孫の手を取った。

「達者で暮らせ。」

旅人の胸に再び熱いものが込み上げてくる。

「はい。おじい様もお達者で。」

恐らくこれが今生の別れとなるであろう。手から手へ熱い思いが伝わる。

「夜が明ける。早く行け。」

比等に促されて、旅人の一行は館を後にした。

夏の夜は短い。辺りはもう薄明るくなってきた。

「湖にでも行くか。」

比等は郎女を誘って湖畔を歩いた。父は一言もしゃべらない。

(戦になる。御史大夫としてやらねばならぬことは山ほどある。だが、今は孫たちに逃げる時間をやろう。都の中にも吉野に関りのあるものは多い。第一、新しい大王の妃十市皇女にしてからが、大海人皇子の娘ではないか。夜明けまでに一体どれだけの人が都を抜け出すことや。夜が明けたら、都は空っぽになっていくかも知れぬ。わざわざわしが吉野の拳兵を知らせることもあるまい。)

見た目はのんびり湖畔を歩く親子の姿に、旅人と田主の脱出を疑う者はいない。

旅人の一行は南を指して進む。家影がまばらになってほっとした頃、行く手に数人の兵士がたむろしている。旅人の手を引く従者の手に力が入る。旅人の胸は不安に高鳴る。

「待て。どこへ行く。」

兵士の声が鋭い。供の一人が頭を下げる。

「苦勞様です。蘇我大臣様の家の者でございます。これより主の命で難波へまいります。」

「左大臣様のご家来ならよろしかろう。大倭では不穏な動きがあるらしいか

ら氣を付けて行きなされ。」

怖かった。捕まったらどうしよう。旅人は走り出したい思いを必死でこらえた。

西曆六百七十二年六月二十四日、みずのえさる壬申の乱が始まろうとしていた。

あれから七年。初夏のある日の昼下がり。庭の橘が白い可憐な花を付け、緑を渡るそよ風がかぐわしい香りを運んでくる。

あすか飛鳥の浄御原宮で、きよみはらのみや後の菟野皇女に呼ばれた阿閉は、あへ菟野の突然の昔語り
に戸惑っていた。普段から物静かで重々しいこの姉の話を、面と向かつて聞
くのはこれが初めてである。時折鳴き渡る時鳥ほととぎすの声に耳を傾けながら、昔
を懐かしむように菟野はゆっくりと言葉を紡ぐ。

あの日、抜け出したのは近江の都にいた人々だけではなかった。同じ頃、
吉野の宮でも逃避行が始まっていたと。

「それはもう必死でしたよ。見張りがいるかもしれないからね。敵てきに気取
られぬよう夜明け前の暗いうちに抜け出したのです。」

（敵。私もその敵の中の一人だったのだろうか。それにしても、何だつて今
頃こんな話をするのだろうか。）

菟野の話を聞きながら阿閉は心の中で問いかける。阿閉もまた、何も知らず
に近江の宮にいたあの日のことを思い出していた。

「どんなに待っていたことか、あの日が来るのを。吉野に入ってから半年
というもの、近江方に気取られぬよう、綿密に計画を立てて来たのです。準
備はすべて整いました。そうです。いったん立ったからには一気にことを進
めねばなりません。私も緊張して体が強張こわばっていましたよ。命を賭かけた戦い
の始まりでしたからね。」

今でも菟野は昨日のことのように思い出す。

敵の見張りがいるかもしれない。半年を過ごした吉野宮を、夜明け前の闇
に紛れて徒歩でひそかに抜け出した。侍女に手を取られ、岩を踏みしめて一
歩一歩先へ進む。慌しい出発であったが、迷いはない。菟野はもう後ろを振
り返らない。

（必ず戻ってくる。待っていてよ。必ず勝って戻ってくるから。）

一行は四十人ばかり。半分は女子供である。誰も口をきかない。朝だとい

うのに蒸し蒸しと湿気た空気が汗ばんだ肌に纏わり付く。草壁王が転んだ。木の根に足を取られたらしい。山道である。足許はまだ暗い。歩き慣れないこの息子に暗い山道は辛かろう。草壁はまだ十一歳である。心は焦るが、道はなかなかかどらない。表情は見えないが、恐らく夫大海人の顔も陰しかろう。

辺りが明るくなる頃、待ち構えていた県犬養大伴の馬に大海人が乗り、

菟野も輿に乗った。津振川まで来ると、先回りをしていた舎人に抱えられて、

草壁王と忍壁王も馬に乗った。宇陀の阿騎野では、知らせを聞いた大伴

馬来田が、甥の御行を連れて後を追って来た。ここでようやく小休止を取っ

て食事をしてしていると、近くで狩りをしながら待ち構えていた大伴大國が二十

人程の従者を連れて一行に加わった。大海人の側近の大伴友国が知らせたの

であろう。近江朝で不遇をかこっていた大伴氏は、一族を挙げて大海人に

賭けている。途中で伊勢へ米を運ぶ馬五十頭を召し上げると、ようやく全員に馬がいきわたった。

宇陀の大野まで来ると日が暮れた。星は出ているが、山道は暗くて危ない。

女たちは慣れない馬に揺られっぱなしで息も絶え絶えである。忍壁の母梶姫

は、かろうじて馬の背にしがみついているが今にも振り落とされそうに喘いでいる。草壁と忍壁は、舎人に抱かれたまま眠ってしまった。

「少し休もうか。」

大海人が疲れた菟野をいたわって声をかける。だが、その視線の先には梶姫がいる。

(誰を気遣っているのやら。)

腹の底に住み着いた邪鬼が囁く。菟野は梶姫に聞こえるように答えた。

「大丈夫です。先を急ぎましょう。ついて来られない者は後からゆっくり来ればよいでしょう。」

追っ手が迫っているかもしれない。置いて行かれては捕まってしまう。梶姫は慌てて体を起こした。事は急を要する。村の家々の垣を取り壊して松明に

すると、一行は更に先へ進んだ。

名張なばりに着いたのは、もう真夜中だった。駅家うまやの役人たちは大海人が来ると聞いて逃げ出した後だった。駅家を焼いて氣勢を挙げる。

「大海人皇子様が東国あづまのくににお入りになるぞお。みんな出て来てお供しろお。」

村中ふれ回ったが、誰一人として出て来ない。

「もうよい。行くぞ。」

横河に出ると急に視界が開けた。菟野は空を見上げた。

「あれは何でしょう。」

大海人も空を見た。星空の真ん中に一筋の黒雲が延びている。突然雷鳴らいめいが轟

いて、見上げた大海人の顔が青白く闇の中に浮かび上がった。

(神のお告げか。)

辺りに張り詰めた空気が流れる。一行が息を呑んで見守る中、おもむろに懐から式しきを取り出すと、大海人は肅々として吉凶を占った。大海人は天文、遁

甲こうに明るい。やがて厳かに口を開いた。

「天下が二つに分かれる祥さかである。だが、最後には我が天下を取るであろう。」

「おおうつ。」

どよめきが山々にこだました。

勇んで馬を駆けさせる。勢いに乗って伊賀の駅家を焼いて更に進軍を続ける。中山まで来ると郡司ごほりのみやうじ達が数百の兵を率いて味方に加わった。少しずつ膨れ上がる軍勢に菟野の表情も緩んでくる。夜明けにようやく食事を取った。柘植つげでは近江から抜け出して来た高市が合流した。大海人の長男高市はこの時十八歳。若い高市の参軍は、菟野にとっても嬉しく頼もしい。鈴鹿では伊勢の国司くにのみかみ守が出迎え、五百の兵で関を固めた。

鈴鹿関を越えれば東国である。ここまで来れば追っ手は来ない。止まってもいても体が揺れる。体を伸ばしたい。大地の上で横になりたい。誰の思いも同じである。日が暮れて休もうとしたが、今にも降り出しそうな空模様である。風も出てきた。

「行きましよう。」

菟野はほとんど感覚を失った体でまた輿に乗った。

突然大粒の雨が降り出した。横殴りの雨が容赦なく冷え切った体に叩きつける。雷まで鳴り出した。山全体がごうごうと鳴り響いて一行の行く手を阻む。嵐のすさまじさに、誰もが先行きの不安を覚えずにはいられない。夏もそろそろ終わりである。ぐっしりと濡れた衣が重く冷たくなって体にまわりつく。草壁の唇は紫になって震えている。目がうつろである。熱があるのだろう。可哀想にと思う前に、体の弱い息子の不甲斐なさに苛立ちさえ覚える。幼い忍壁の方がまだ元気ではないか。ようやく三重の郡家にたどり着くと古家を一軒焼いて暖をとった。

疲れきっていた。死んだように正体もなく眠って目覚めた時、嵐は嘘のようにおさまっていた。嵐が夏の熱気を持ち去ってしまったらしい。さわやかな空気の中で菟野は生き返る心地がした。潮騒が聞こえる。波の音の間を縫って鳥の声が聞こえる。痛む体を引きずるように外に出ると、目の前は一面の海だった。はるか彼方に対岸の低地がくつきりと横たわっている。久しぶりに見る海だった。海はいい。人の心を大きく伸びやかにしてくれる。菟野は大きく息を吸い込んだ。潮の匂いが胸一杯に広がった。

空が茜色に染まっている。やがて空と海が渾然と一体になって、金色に輝く太陽が生まれた。

「ああつ。」

「おおうつ」

同時に背後でどよめきが上がった。いつの間にか起きたしてきた兵士たちが、太陽の誕生の荘厳さに、息を呑んで立ち尽くしていた。大海人もいる。やがて太陽の神秘に魂を吸い寄せられるかのように、大海人は一人浜辺に降り立った。黄金色の日の光を浴びて、草も木も大地も、あらゆる生ある物が一斉に生命の歌を歌い始めた。燦然と輝く太陽の神々しさに、菟野は思わず両手を合わせて頭を垂れた。

太陽が昇り切ると大海人は向きを変えて、居並ぶ兵士たちを見渡した。太陽を背にした大海人の姿は、金色に輝く大きな太陽の胎内にすっぽりと包み込まれて見えた。

「我は、日の神の子である。我は、必ず、勝つ。」

「おおうつ。」

厳かに勝利を宣言する大海人の力強い言葉に、兵士たちの間から歓声があが

った。

その太陽を神として祀る社が、南の方にあるという。菟野は大海人と共に川原に下りると、体を清めて日の神に戦勝を祈願した。

日の神の加護を得てか、この日には近江を逃げ出した大津が無事合流。更にかねての手筈通り、美濃の軍勢三千が蜂起して不破関を押さえた。大海人は菟野や女子供を桑名郡家に残すと、自身は不破の野上に陣を進めた。

更に、高市を和射見にやっつて直接全軍の指揮を取らせた。吉野を抜け出してまだわずか四日目である。

(よくぞ、ここまで来たものだ。)

すべてが順調に運んでいる。それでも不安が脳裏をよぎる。集まったとは言え、吉野方は所詮反乱軍である。地方の中小の豪族が中心で、大伴氏以外は寄せ集めの兵士である。

(人がいない。)

頼りになる将軍も参謀もない。全てを大海人一人で決めねばならない。

(近江方には戦略に明るい群臣がたくさんいる。やつらは共に策を練って向って来るだろう。だが我には相談できる相手もない。)
つい、溜息が出る。

若い高市はむきになって腕まくりをする。

「近江の群臣、いかに多くて、日の神のご加護を受けた父上に、はむかうことができましようや。私のご命令を受けて攻めるからには決して防ぐことなど、できるものではありません。」

高市の力強い言葉が嬉しい。高市の母は海神の子孫と伝えられる宗像氏の出である。竜神の血を引いているのであろうか。猛々しく勇ましいこの息子が頼もしい。大海人は高市の手を取って背をかき撫でた。

鈴鹿、不破の二つの関を押さえることで東国の兵は全て大海人に帰した。

尾張国司は二万の兵を率いて味方に加わった。大倭では、大伴吹負が甥の安麻呂らと共に、苦戦しながらも古京を守り抜いたし、筑紫の兵は動かない。

近江方が西国の兵を集める間もなく、吉野方は琵琶湖の東と北から同時に近江の都に迫る。

七月二十二日、瀬田の橋を挟んで、いよいよ両軍最後の決戦の時。近江方

は総大将の大夫が自ら決戦の場に臨んで指揮を取る。大夫は大海人の甥であり、大夫の后十市は大海人が額田女王ぬかたのおおきみに生ませた娘である。その上、大夫は菟野にとつても血を分けた弟である。だが、大夫の母は身分が低い。

「大夫ごときに負けてたまるか。」
これまで大夫を臣下のように見てきた菟野である。

近江宮大王には他にも川島、志貴しきの二人の皇子がいるがいずれも卑母ひぼの出である。当然同腹の弟である大海人が跡を継ぐべきだと思ってきた。ところがある時、唐使の劉徳高りゅうとくこうが大夫を見て無責任なことを言った。

「この皇子の風骨は世間の人のものではない。誠にこの国の人のものとは思えない。」

この一言で、父近江宮大王が大夫に位を譲りたいなどと愚かなことを考えるようになったのだ。父の、弟ではなく、息子に跡を譲りたいと思う気持ちが、この時の菟野にはまだわかっていない。

骨肉の争いはかえって憎悪を膨らませ、その陰に癒しようなない悲しみを秘めている。この時大夫、二十五歳。菟野は二十八歳である。

戦いの間、菟野はずっと桑名の郡家ごほりのみやけで日の神に祈り続けた。神に祈ることで、菟野も共に戦っているのである。追い詰められたとは言え、近江方は正規軍である。数の上では近江方の白旗が吉野方の赤旗を上回っている。

菟野の祈りに熱がこもる。菟野の魂は体を離れ、風に乗って戦場目がけて飛んで行く。戦場では川を挟んで赤旗と白旗たいじが対峙している。怒号の中を無数の矢と石が間断なく飛び交う。菟野の祈りが激しさを増す。木綿たすきをか

け、玉の緒をすり袖を振る姿が激しく揺れる。祖母である後岡本宮大王のちのおかもとのみやのおおきみ

宝たからの祈りのスタイルが、いつの間にか菟野のものとなっている。胸が痛む。

息も絶え絶えになりながら、なおも菟野は祈り続ける。

胸が締め付けられる。

「あああつ。」

菟野が悶絶もんぜつしたその時、戦場に強い東風が吹き抜けた。その風に乗るように赤旗が炎となって橋を嘗め尽くす。喚声と共に法螺貝ほらがいが鳴り、角笛と太鼓が轟く。土煙と地響きの中、白旗と赤旗が入り混じって、やがて赤一色に染まっ

ついでいく。

長い時が過ぎた。侍女に介抱されて気づいた時、菟野は味方の勝利の知らせを聞いた。

(勝った。ついに勝った。)

勝利の喜びの後に、深い脱力感が残った。

「でも、大友皇子様のお行方は、まだわからないそうです。」

侍女は不安げに告げる。大友の息の根を止めてしまわねば、また大海人のように何時拳兵せぬとも限らない。

「その心配は無用です。手は打ってあります。」

菟野には勝算があった。

その頃、大友は山崎の山中をさまよっていた。傷ついた体で道なき道を歩く。付き従っていた群臣たちは、いつの間にか散り散りになってしまった。

最後まで残ったのは物部麻呂と舎人が一人。吉野方は血眼になって大友の行方を追っている。逃れることはできない。疲れた。

(もういい。)

大友は天を仰いだ。父が懐かしかった。大友は自害して、大友の首を抱えた物部麻呂が捕らえられた。

戦いは終わった。近江方の主だった者は斬られ、或いは遠国に流された。

大海人は飛鳥に戻って即位し、菟野も后になった。

日がどつぷりと暮れてしまった。侍女のつけた燭台の炎の揺らめきが、

菟野の顔に怪しげな翳を作る。長い昔語りが終わろうとしている。

「私も戦ったのです。この天下は、大王と私が共に戦って勝ち取った天下です。ですから、日継は我が子草壁を置いて他にはありません。ただ。」

菟野は大きな溜め息をついた。戦う女菟野にも弱みがあった。

「ただ、誰に似たものか、草壁は気が弱すぎます。」

ひ弱な草壁に位を継がせるには、しっかりした妻をつけてやらねばならぬ。

「ですから、そなたに草壁を支えてやってほしいのです。」

(ああ、そういうことだったのか。)

菟野の長い昔語りの意味がわかって、阿閉の驚きは徐々に不安へと変わって

いく。

あの時、阿閉は息を潜めてひたすら戦いが終わるのを待っていた。あの心細さ、恐ろしさ。

(戦いなんて絶対嫌。私は生涯人と争うようなことはしないでおう。)

阿閉は一人心中で誓っていたものである。

それなのに、あの時この姉は自分も一緒に戦っていたと言う。

(なんてお強い方なんだろう。この方は自分が戦い取った天下を草壁様に譲りたいのだ。それを私にも手伝えとおっしゃっている。でも、私はこの方のように強くはない。)

阿閉は畏敬の念を抱いて姉を見つめた。と同時に、違和感をも覚えずにはいられない。

戦いが吉野方の大勝利に終わった後、近江宮に残された女たちはまるで戦利品か何かのように吉野方の功労者に分け与えられた。阿閉の同腹の姉御名部にも、吉野軍を指揮した高市が通ってくるようになった。高市の逞しい堂々とした姿を垣間見るたびに、阿閉は胸の高鳴りを覚えて物陰に隠れた。高市へのほのかな想いを胸に秘めたまま、宮殿の奥深く忘れられたかのように一人ひっそりと過ごしてきた阿閉である。

忘れていたのではない。この七年間、菟野は特別の思いでこの妹を見つめてきた。菟野も阿閉も共に近江宮大王の娘である。しかも阿閉の母は菟野の母の妹である。多くの兄弟姉妹の中でも、同じ蘇我倉山田石川麿の血を受け継ぐ者として、菟野は早くからこの妹に目をつけてきた。強烈な個性の持ち主の多いこの一族の中では、珍しく地味で目立たない娘である。だが菟野の鋭い目は、この妹の中に、控えめだが芯のしつかりした強さを見て取っている。この妹なら、気弱な草壁を影で支えてくれるだろう。

「草壁を頼みましたぞ。」

姉の頼みというよりは、後の命令である。嫌とは言えない。好むと好まざるとに関らず、否応なしに権力争いの渦の中に巻き込まれていく不安に、阿閉の小さな胸はおののくばかりである。

翌日、大王となった大海人と菟野は大勢の供を引き連れて吉野に登った。

「あの頃と変わりませんね。」

さわやかな風が梢を渡って、汗ばんだ肌に心地よい。吉野は、緑の岩を打つ水沫の白さも、青い空に浮かぶ雲の白さも、昔のままに菟野を迎えた。興に揺られながら菟野は七年前の脱出行を思い出していた。

「いや、変わっているとも。」

今の大王は、あの時の大海人ではない。大王の目には、木々の緑も、岩走る清水も見るもの全てが輝いて見える。戯れの歌まで飛び出してくる。

よき人のよしとよく見てよしと言ひし

芳野よく見よよき人よく見

(26)

これまで大王家を脅かしていた大豪族のほとんどを、壬申の乱で打ち滅ぼしたことで、大海人は諸国の兵力を直接大王の指揮下に組み込むことができようになった。大海人は政治の中枢に王族を配して大王専制の体制を作ることに成功したのである。兄近江宮大王は、唐に対抗し得る強力な律令国家を作ろうとして豪族たちの反発を買い、志半ばにして世を去った。皮肉なことにその近江朝を倒す事で大海人は兄の遺志を達成したのである。

だがこの権力は、壬申の乱を勝ち取った大海人だからこそ持ち得た力である。自ら甥を殺して権力を手中に収めた大海人としては、自分の死後が不安である。皇子はたくさんいる。近江宮大王の皇子もいる。みんな仲良く国をたてていけるだろうか。唐や新羅が虎視眈々と狙っている今、兄弟の不和は国を滅ぼす。十年程前に、七百年も続いた高句麗王朝が滅んだのも兄弟の不和が原因だった。わが子たちには共に手を取り合って国を守ってもらいたい。

大海人が菟野と皇子たちを連れて、自らの出発点であるこの吉野の地にやってきたのは、そんなやむにやまれぬ想いからであった。

「我はここで、永遠の無事を、そなたたちと誓いたいと思うが、どうか。」
大海人の問いに皇子たちは応える。

「仰せのとおりです。」

まず、草壁が進み出て誓いの言葉を述べる。草壁はもう十八歳になっている。

「お誓い致します。我ら十余人の皇子、それぞれに母は違いますが、共に大王の命令に従って、互いに争うことなく、助け合ってまいります。もしこの後、この誓いに背くことがあれば、身は滅び、子孫も絶えることになりましょう。この誓い、決して忘れは致しません。」

次いで大津が誓った。大津はひとつ下の十七歳。菟野の同腹の姉太田皇女の子である。次は高市。高市はこの時二十五歳。壬申の乱では先頭に立って軍を指揮したが、母が倭国の出のために、草壁・大津の下に立っている。それから川島、忍壁、志貴が続く。川島・志貴は近江宮大王の子である。

「我が子たちはそれぞれ母が違うが、これから我は同じ母から生まれた兄弟のように慈しもう。もしこの誓いを違えたなら我が身はたちどころに滅びるであらう。」

大海人も誓いを立てると、衣の襟を開いて六人の皇子を抱いた。菟野もまた大海人に倣って誓いを立てた。

(茶番だ。)

成長した皇子たちを抱きながらも、菟野は我が子草壁のライバルたちを信用してはいない。

菟野は十三歳で叔父大海人の妃みめになった。以来ずっと大海人と共に歩んできた。倭国が百済と共に唐・新羅の連合軍と戦った時も共に筑紫へ出兵した。その頃筑紫で相前後して生まれたのが草壁と大津である。大海人が吉野に籠もった時も一緒だった。だからと言って、大海人が大勢の妻の中で特別に菟野を愛しているとは思ってもいいない。

(人質に過ぎない。)

父中大兄は、乙巳いっしの変の後吉野に籠もった伯父古人大兄皇子の娘倭媛やまひひめを妃にした。古人の挙兵を封じるための人質である。更に古人を吉野に襲って殺しておきながら、倭媛を后にしたのは大王の正当性を主張するのに必要だったからである。壬申の乱に大海人が菟野を伴ったのも、大王となるために必要だったからだ。菟野は思っている。だから菟野が后になったのは当然だし、菟野の子草壁を日継にするのも当然だと思っっている。だが、大海人はいまだに日継を決めない。それが、菟野には不満である。

大海人にとつては、頭の痛い問題であった。草壁は素直な優しい青年に成長した。だが、余りにも素直すぎる。戦後の混乱した国を託すには心許ない。高市や大津の方が明らかに優れている。まだ幼いが、弓削も先の楽しみな少年である。とりあえず大海人としては大津を日継に立てたい。だが、それは菟野が納得しないだろう。せつかく収まった国の乱れとなることは眼に見えている。やはり、草壁を立てるしかあるまい。

吉野から戻ると、阿閉が草壁の妃に立ち、翌年には女兒が生まれた。「女ですか。」

菟野は落胆を隠そうとはしない。だが、阿閉はかえって喜んだ。我が子を争いに巻き込みたくはなかったのだ。氷高女王ひたかのおきみと名付けられた女兒の笑顔は、見る者の心を和ませる不思議な力を持っていた。父となったことで草壁も自信を持つようになった。

草壁が二十歳になると、正式に日継に立って朝政を聴いた。いつもはしとやかに振舞って感情をあらわにしない菟野の晴れ晴れとした笑みに、大海人の思いは複雑だった。草壁でも国を保てるように急いで国の基盤を整えねばならない。

その年の内に律令制定の詔を発し、これと平行して、川島らに正史の編纂

を命じた。新しい国家体制とそれを支える祭祀の確立を目指したものである。

続けて次代を担う粟田真人、あわたのまひと 中臣大嶋、なかとみのおおしま 柿本佐留などの優秀な文官九人を起用した。この中には最後まで大友に従った物部麻呂も加わっている。これには菟野の意向が強く働いているとも噂された。

阿閉はそんな政治の駆け引きから距離を置いて、夜ごと草壁の訪れを待つ。だが、母親の過保護のもとで育った夫は、事あるごとに母と妻を比較する。

「仕方ありませんよ。お后様は特別お強くていらっしやいますもの。」

阿閉は最初から諦めている。菟野と競ってみたところでかなうわけがない。阿閉の漂わせるゆったりした雰囲気が、いつの間にか草壁のピリピリした神経を柔らかく包み込んでいく。

「それもそうだ。」

妙なところで気が合った。これまで能力以上に背伸びをしてきた草壁は、ようやく安住の地を見つけたように見えた。

草壁の心のゆとりを多くの人は歓迎した。だが、一人息子の心の変化は、菟野には寂しい。

(嫁に息子を取られた。)

思いもしない事態だった。

傷心の菟野を宥めるかのように、阿閉が男児を生んだ。男児は軽王と

名づけられた。これは菟野には最高の贈り物だった。

「有り難う。」

真綿にくるまれた小さな赤子を抱いた時、菟野は訳もなくいとしくて胸が締め付けられるようだった。草壁を抱いた時は気負いがあった。今は責任がないだけ気持ちにもゆとりがある。決して美しいとは言えない、今にも壊れそうなこの肉の塊が、いつかは菟野の夢を受け継いでくれるだろう。幼い頃から抑え続けてきたさまざまな思いが込み上げてくるのであるうか。菟野は一筋の涙が頬を伝っていることにも気付かない。

「お后様。」

強いはずの姑の涙に、阿閉は息を飲んだ。初めて見る姑の涙だった。涙の奥に秘められた深い悲しみが若い阿閉にはまだ理解できてはいない。